

## 1. 学習の様子

### (1) 小単元②の流れについて

この活動は、子どもたちに校舎の全景を書いた地図を見せることからスタートした。

入学して初めての大きな学校行事である運動会も終え、学校の様子にだいぶ馴染んだ児童に、提示された全景には、自分達が遊ぶ遊具もなければ何度も行った校長室もない。

そこで、次から次へと、自分達に関わりのあることで、地図に載っていないことを発表する。「バス乗り場がないよ」「アスレチックがない」「保健室がないよ」「カエルの池がないよ」など生活に密着しているものを話す。

では、先生が書いた地図をみんなが大好きな学校の地図～『わくわくマップに変身させよう』～ということで、活動を展開していった。『わくわくマップを作ろう』では、校舎の中を書き、『もっとわくわくマップをつくろう』では、校舎の外をかくということで、2段階で活動を行った。

### (2) 『わくわくマップをつくろう』の実際

教師が提示した地図の不足分を補おうと、子どもたちは、まず校舎の中の行きたい場所へ三々五々出かけていきメモを取ってきた。

行きたい場所は、教師が事前に手をあげさせ把握しておいたが、行動を始めると、子どもたちはどこへ行きたいのかが不明瞭になり、友達につられて動くといった児童もいた。

しかし、中には、興味を持っている場所へ出かけていき、しっかり見てメモをとった児童もいる。

A児は、小単元②で校長先生と仲良しになり、今回の活動においても、真っ先に校長室へ行き、机の上においてあった図鑑の絵をかく。校長先生に見せてもらった海の生き物がのっている図鑑である。A児は、以前に校長先生と仲良しになり、秘密「校長先生は、海の生き物のウミウシが好きということ」を聞いていた。今回の活動でも真っ先に校長室をかくことになったのだろうと思われる。

また、本時のまとめとして絵カードの交流をするとき、体育館の鉄棒をかいた児童が、その説明で「体育館でみんなで鉄棒をしたのが面白かったからかいたんよ。ぼくは、ばんざいをしているよ」と発表した。すると、「鉄棒で、じゃんけんして勝って喜んでいるなら、負けたお友達も書いた方がいいよ。」などとアドバイスをもらい、そのことにより一層の工夫がもたらされた。

### (3) 『もっとわくわくマップをつくろう』の実際（小単元②の4時間目）

この活動の評価規準は、**【楽しく遊んだことや発見したことなど自分の思いを素直に表現し、友だちに伝えることができる。】**である。

『わくわくマップ』を作った後、校舎の外にあるもので、子どもたちが書きたいものは何かを振り返りカードで把握しておいた。

実際に校舎の外へメモを取りに行くときに、「なぜそれを書きたいの?」「そこで、どんなふうに遊んだの?」などと、子ども一人一人に言葉をかけた。その言葉かけで児童にとって、書きたいものの意味付けがはっきりしたように思う。

メモを終えた児童は、教室へもどり教師と対話をした。何を書いたのか、何をみつけてきたのか、どんな楽しいことがあったのかなどである。対話を終えた児童には、話したことを吹き出しに書かせメモにはらせておいた。いつもは何を書いていいのかがはっきりしなかったり、集中して取り組めなかったりする児童も、メモをとった場所に補助教員がついていったことでその言葉かけで、多くメモを取ることができた。この対話をもとに、教師は、次時の授業での声かけや準備しておけばよいものなどを考えることができる。

そして、本時になった。

本時は、子どもたちがメモをもとに、友だちに伝えやすいように大きな絵カードを書く活動である。そのカードの中には、楽しく遊んだことや発見したことを素直に書くことがねらいである。

まず始めに、今日の学習のねらいを明確にした。

自分の書く絵カードは何だったかを振り返る。その際には、単に、“遊具を書きません”ではなく、“〇〇さんと遊んで楽しかったので、アスレチックの遊具を書くよ”というふうに、書く理由も述べさせ、今日の課題を明確にし、活動に入った。

<振り返りカードや本時での児童の様子はC—3に>

#### (4) 子どもの学びの見取りと学びの意味や価値

##### ① 授業の流れについて

本時の評価規準は、『楽しく遊んだことや発見したことなど自分の思いを素直に表現し、友だちに伝えることができる』であった。

前時に書いたメモをもとに、大きく書き、楽しかったことや伝えたいことを吹き出しに書いて発表するという流れを考えていた。子どもたちは、自分の書きたいことは決まっていたが、中には教師との対話で十分話せず、教師が意図を把握できないでいたため、本時に十分活動できなかった例もあった。

次の時間に聞いてみると、本人が書きたいさくらの木は、別のさくらの木であり、そこで、友だちと落ちているさくらんぼの実で遊んだことを表現したいとのこと。教師に話したことで、安心して絵に表現していた。

“自分の思いを絵にかく”という活動は、どうしても、思考を表現するというより、工夫して書くことにこだわりを持ち過ぎる児童がいる。そのため、伝える時間が少なくなることがある。そこで、授業の始まりには、時間配分を子どもと確認する、作る作業に興味をもちそうな物を見せないなどの細かい配慮が必要だと思う。

伝え合う活動の後、子どもたちは雨降りにも関わらず、友だちが教えてくれた場所へ行き、楽しみを確かめている。何度も通い、友だちの絵カードに自分の気持ちを書いていった。

##### ② 授業中やその後の声かけについて

児童の書いたメモと対話で、子ども一人一人の書きたいものへの関わりを予めつかんでおいたので、授業中は、児童一人一人への声かけを名簿にメモしておいた。そこで、机間指導の時間には、子どもの活動の様子を見ながら「これは、こんなことをして遊んでいたのね」「どんな声が出た？」とか「ダンゴ虫は、何をしていたの?」「ダンゴ虫は行列を作って遊んでいた」など、児童の素直な言葉を引き出したり、動作化を引き出したりと、活動を促すのに有効であった。

##### ③ 評価（子どもの学びを見取ること）について

毎時間、子どもの学びを見取る（子どもはこの時間どのように動いていたか？どこまでできていたか？）ことで、児童一人一人への言葉かけが違ってくる。また、教師は次の児童の活動がある程度予測されるため、心の準備ができていく。また、普段の予想から大きく違う児童に対して「どうしてなんだろう」「家ではどうなのかな」などと、表出された子どもの動きだけでなく、背景を探ろうとする。毎時間振り返ることは大変であるが、こういった見取りをしていくことが評価と指導の一体化につながっていくのだと思う。